

明治16(1883)年7月、いまNRF日比谷ルビが建つ皇居前に鹿鳴館が完成した。設計は招雇し、外国人のジョサイフ・コンドルである。建設の目的は不平等条約改正交渉の舞台とする。21年、おちに『日本風を吹かす』を著す志賀重昂と『政治評論雑誌』日本を吹かす』を創刊して言論活動を始めた。バレーや舞踏が人々を魅了した。夜な夜な催された。鹿鳴館時代の幕開けだ。

もちろんで西洋の猿まねの戯れ、醜態の外に漏れたのに刺激され、一面は政府が保安条例を執行し、桔尾花して、19年10月に起きた英に驚く狼狽が加減に動きかき、余りだらしなく仕方を生きた。鹿鳴館時代はあつた。何とかせねばならぬ』との思いで政教社を設立した。志賀重昂は述べ、24年、32歳のときに評論『眞善美日本人』と『偽悪醜日本人』を発表。前者で救命ボートで脱出した醜日本人』を著す。前者で破、欧州の乗組員26人全員が救命ボートで脱出した。『眞善美日本人』と『偽悪醜日本人』を著す。前者で死したのである。

事件後、文部省編輯局で『日本公教史』の編集作業に従事していた三宅雪嶺は、官職を捨てて野に下

る。21年、おちに『日本風を吹かす』を著す志賀重昂と『政治評論雑誌』日本を吹かす』を創刊して言論活動を始めた。バレーや舞踏が人々を魅了した。夜な夜な催された。鹿鳴館時代の幕開けだ。

もちろんで西洋の猿まねの戯れ、醜態の外に漏れたのに刺激され、一面は政府が保安条例を執行し、桔尾花して、19年10月に起きた英に驚く狼狽が加減に動きかき、余りだらしなく仕方を生きた。鹿鳴館時代はあつた。何とかせねばならぬ』との思いで政教社を設立した。志賀重昂は述べ、24年、32歳のときに評論『眞善美日本人』と『偽悪醜日本人』を著す。前者で救命ボートで脱出した醜日本人』を著す。前者で破、欧州の乗組員26人全員が救命ボートで脱出した。『眞善美日本人』と『偽悪醜日本人』を著す。前者で死したのである。

事件後、文部省編輯局で『日本公教史』の編集作業に従事していた三宅雪嶺は、官職を捨てて野に下

明治の50冊

14

三宅雪嶺

眞善美日本人 偽悪醜日本人



『眞善美日本人』
『偽悪醜日本人』

尽くすなり、民種の特色を究揚するは人類の化育を裨補するなり、護國と博愛とを張する。後者では、自國固有の価値を擧視してひたすら歐化と書き始め、日本人が固有の価値を自覚してそれを磨いてゆけば、白人の劣陥を生じる學術與、美術界の腐



中村研一が昭和18年に描いた三宅雪嶺(写真はいずれも續記通経済大三宅雪嶺記念資料館提供)

年、加賀藩家老の儒医の家に生まれる。本名・雄一郎。東京大文学部哲学科卒。明治21年に志賀重昂と政治評論団体「政教社」を設立。『眞善美日本人』を創刊して政府の専制と欧化主義を批判する。著書に『王陽明』『宇宙』『明治思想小史』『同時代史』など。ジャーナリスト、政治家の中野正剛は娘婿。昭和18年、文化勳章受賞。20年、死去。

世界に開かれた国粹主義..

ち、古びることがあります。この2冊もラトフのイデア論の影響が感じられます。『流通経済大三宅雪嶺記念資料館の学芸員、五十嵐卓三は解説する。十嵐卓三は解説する。この世界に開かれた国粹主義は、やがて排撃すべきにあらずといふことも、そのこれをなさんにはあらかじめ守るところを悲劇に導く。そして現在在の日本は、グローバルに迎合してどんどん固有の価値を失い、平板化する。一方のよつに見る。昭和60年に2冊は講談社学術文庫にまとめられて復刊されたが、初版6000部を発行しただけで重版はかからなかった。現在も重版の手定はないという。五十嵐卓三は言う。『こしてゆくのだ。』

『雪嶺はジャーナリストである前に哲学者でした。た、他を模倣せんより、自家固有の特質を發達せしむるの優たることあにならないのは、ものごとを根源的に考えようとしたから。だから普遍性を持つ

学というものがありません。知的でウイットに富んだ。幾く身を引くことで後輩も育ちますし、ほかの役を務めたときに浅見の1×1がつかまうことを断先生の前にも言えない魅力でもあったと思います。シヤで人前に立つのが決して好きではなかった先生です。その後も先生とはじつなされるまで、家族ぐるみの付き合いが続きまして。先生がシリアの中で浅見光彦に語らせた素晴らしい精神は、今も私の中に生き続け、映画『天河伝説殺人事件』の出陣式を東京の神田区に撮影したとき初めてお会いしましたが、先生から後日「初めて見たとき、ここに浅見光彦がいた」とおっしゃっていただきました。『浅見光彦』シリーズなど旅情エッセイ作品で知られる作家の内田康夫さんらあるときには、先生から『僕が新しい作品を書いていると君の顔が引き出されていく』と君の顔が引き出されていく。先生から後日「初めて見たとき、ここに浅見光彦がいた」とおっしゃっていただきました。『浅見光彦』シリーズなど旅情エッセイ作品で知られる作家の内田康夫さんらあるときには、先生から『僕が新しい作品を書いていると君の顔が引き出されていく』と君の顔が引き出されていく。



「文鳳堂雜纂」に収録された勝海舟の上申書

は意外に入ってきていた。士が生まれる素地が作られた。特に衝撃的なニュースが来ていく。そして嘉永6(1853)年のペリー来航を機に、時勢が目まぐるしく転

●新田次郎賞に奥山景布子さん 第37回新田次郎文学賞(新田次郎記念協会主催)は、奥山景布子さんの「葵の残葉」(文芸春秋)に決まった。賞金は100万円。授賞式は5月31日、東京・大手町のレベルXXIで。

●日仏翻訳文学賞に石橋正孝さん 第23回日仏翻訳文学賞(小西国際交流財団主催)は、石橋正孝さん訳を手掛けた月ジュール・ベルヌ著「地球から月へ」を回って、上も下もなく(インスクリ

●現代詩花椿賞が終了 資生堂は、優れた詩人とその詩集を顕彰する「現代詩花椿賞」を終了すると発表した。同賞は昭和58年に創設。過去に谷川俊太郎さん、石牟礼道子さん、最果タヒさんらが受賞している。

●吉本隆明と中原中也の研究集会 詩人の中原中也と、評論家の吉本隆明をテーマにした研究会(中原中也の会主催)が5月19日、横浜市の神奈川近代文学館で開かれる。仏文学者・鹿島茂さんの講演

江戸幕府、近代化へ努力の

その中心メンバーとして、昌平校學問所を開設していた人材登用試験の合格者たち。身分制度に縛られた。幕末になると実業職に昇る道が開けて、その中で育った人材が、幕府瓦解後も引継ぎ近代化を担っていた。坂良宏氏は「新政府調所を接收して使用したものは使われてい

5月6日まで。入

料。問い合わせは同

◆(慶井 隆)

うとしていたかを看